



終戦から70年

# ドラマ「カーネーション」に見る 私たちの過去・現在そして未来

脚本家・渡辺あや氏をお迎えして



公開シンポジウム

2015年8月27日(木) 18:30~20:30

主催 21世紀社会デザイン研究科・  
社会デザイン研究所

会場 立教大学 池袋キャンパス11号館  
地下AB01教室

講師 渡辺 あや氏(脚本家)

司会・聞き手 長 有紀枝  
(立教大学大学院21世紀社会  
デザイン研究科・社会学部教授)

挨拶 冒頭に、中村陽一21世紀社会デザイン  
研究科委員長による挨拶と渡辺あ  
や氏の作品に関する解説あり。

講師略歴

## 渡辺 あや (脚本家)

島根県在住。1970年生まれ。甲南女子大学卒業。  
家族の赴任に伴いドイツで5年間を過ごし帰国後、脚本家としての活動を開始。

主な作品

### 映画

ジョゼと虎と魚たち (2003年)、メゾン・ド・ヒミコ (2005年)、天然コケッコー (2007年)、  
ノーボーイズ、ノークライ (2009年)、カントリーガール (2010年)、合葬 (2015年)

### テレビ

火の魚 (2009年、NHK 広島)、その街のこども (2010年、NHK 大阪)、  
カーネーション (2011年~2012年、NHK 大阪 連続テレビ小説)、  
ロング・グッドバイ (2014年、NHK)

受賞歴

第62回毎日映画コンクール 脚本賞 (『天然コケッコー』)  
第36回放送文化基金賞 脚本賞 (『火の魚』、『その街のこども』)  
第61回芸術選奨新人賞 放送部門 (『その街のこども』)  
第33回ヨコハマ映画祭 脚本賞 (『その街のこども』)





#### 司会(長):

皆様こんばんは、本日はようこそいらっしゃいました。私は、立教大学21世紀社会デザイン研究科の長 有紀枝と申します。本日、司会と聞き手を務めさせていただきます。

簡単に、本日の流れについてご説明します。この後、私どもの研究科の中村陽一委員長よりご挨拶と、渡辺さんの作品について短時間ではありますがお話をさせていただきます。その後、「カーネーション」総集編の一部ですが、戦争に関わりのある部分を皆様と一緒に視聴したいと思います。それから、渡辺あやさんをお呼びいたしましてトークセッションを約50分、皆様のご質問に答えるような形で10分。最後に渡辺さんが選んでくださった映像をもう一度お見せして締めるといった形を取って参ります。ご質問につきましては随時お受けしてまいります。係りの者が集めに参りますので、いつでもお手を挙げていただければと思います。

では、中村委員長、お願いいたします。

#### 中村陽一委員長:

皆さん、きょうはたくさんお運びいただきましてありがとうございます。いま長教授から紹介いただきました「21世紀社会デザイン研究科」、この公開講演会の主催でもあります立教大学、社会人が中心となっている大学院の研究科委員長を務めております中村と申します。よろしく、お願いいたします

本日は、何と言っても連続テレビ小説「カーネーション」のダイジェストの後、ご登場いただく渡辺あやさんが主人公でございますので、私は前座のつもりで少しだけお話をさせていただきます。通常ですと、「研究科はこんなところですよ」というご紹介のご挨拶をさせていただきますが、その辺はお手許、あるいは受付に研究科のパンフレットなども置いてあったかと思っておりますので、後ほどご覧いただければと思います。少しだけ説明いたしますと、2002年度に設立をされて今年で14年目になります。「社会デザイン」という言葉は「ソーシャルデザイン」という言葉も含めて最近広がり始めていますが、政治経済、社会に始まり、きょうのように映像や文化芸術、アートといった分野に至るまで、「これまでの枠組みをもう一度見つめ直して新たな仕組みを考えていこう」という趣旨で、既に600名ぐらいの修了生の皆さんがいらっしゃり、いま100名以上の在籍中、社会人が8割ぐらいになります。平日の夜と土曜日の授業になりますので働きながらの方が多くですが、そちらのお話はパンフレットも含めてまたご覧いただければと思います。

さて、きょうはチラシにもありますが、終戦・敗戦から70年、俗に「戦後70年」と言われていることと絡む企画ですが、その主題である「カーネーション」自体はこの後、皆さんにもご覧いただきますのでそちらに譲るといたします。

実は、私はご本人を前に大変失礼ですが、渡辺さんのファンです。私自身、はるか昔に映像に関わる仕事を志していた時期がございましたので、未だによく見ます。映画の作品もたくさん書いておられますが、例えば、「エンドロール」を見て、「あっ、これは渡辺さんの脚本だったんだ」と感じる事が非常に多くございます。おこがましい言い方をさせていただければ、私が「いいな」と思うテーマは渡辺さんの書かれたものが何かマッチすることが多く、実は大変印象に残っている作家でいらっしゃいました。きょう初めてお目にかかることができ、大変嬉しく思いました。

映画の作品は非常にたくさん書かれておられますので、それについてお話を始めると長先生に与えられた10分ではとても足りませんので、一つだけに絞ってテレビの番組として作られた作品ですが、この後の「カーネーション」につながる部分もあるようですのでご紹介したいと思います。

その作品は、「その街のこども」というNHKで放送されて、その後、劇場版という形になりました。これは、「阪神・淡路大震災から15年」というところを舞台にして、震災当時、小学生と中学生だった男女の話ですが、神戸にいるときに知っていたわけではなく、たまたま2010年度時点で知り合っただけの夜の街を歩くという設定です。森山未来さんと佐藤江梨子さんが主演です。一見ロードムービー風の設定になっていますが、私はこれを見て単なるロードムービーではもちろんなく、当然、「阪神・淡路大震災」、そして、そのときに主人公たちがいた神戸へと遡る旅で、同時にそこで過ごした子供時代へと遡る旅でもあると思えました。

「その街のこども」というタイトルはまさにそれを象徴しているのかなと思いますが、ただ、私はそういうメッセージ性とともな「大変面白く、いいな」と思ったのは、日常の中にある物語として紡がれているわけです。

生身の人間ですから、もちろん、「震災から15年」という一つの節目であり、それなりに少し厳かな気持ちもないわけではありませんが、やはりブレもするし、決して哲学的や、勇ましいものではありません。私は、そこが大事だと見ています。

例えば、それまで「歩く!」と言って頑張っていたのに、とりあえず目的を達すると、帰りに「タクシーに乗ろうよ」と言い出し、自転車を借りようとするという盗もうとするシーンが幾つか出て来ますが、それも歩き疲れたり、重い荷物を持っていたりする中で出て来る日常の行動のある種ブレとして大変印象的に観たのを覚えております。

多分、そういった「リアル」というものへのアプローチのされ方が、この「カーネーション」にもつながっているのではないかと想像していましたが、先ほどちょっとだけ渡辺さんとお話をさせていただきましたら、やはりそういう側面がなかったわけではないようなので、あながち勘が外れてはいなかったようです。



(カーネーションの総集編が上映された)

今年は、冒頭に申しましたように「戦後70年」ということで巷ではたくさんの催しがあり、いろいろな番組が作られたりしています。同時に、皆さんよく御存じのように国会ではまさにいま議論を呼ぶ審議があります。「戦後」というのはいきなり始まったわけではなくて、その前史といいますか、そこに至るプロセスがあるわけです。その日常というものを、非常に丁寧に描かれた作品だと思って私は「カーネーション」もずっと観ておりました。きょうはその辺をもう一度思い起こしながら、「戦後70年」を日常から離れたところから大上段にふりかぶって考えるよりは、リアルな毎日、日々の日常の生きた人のありようを見ながら、私たちの来し方、生末を考える時間になればいいなど考えております。私の前座のお話はこのぐらいにいたしまして、この後、長教授の進行で映像と渡辺さんのお話を伺っていききたいと思います。私も、観客の一人として一緒に観させていただきたいと思います。どうもありがとうございます。(拍手)

**長**：ありがとうございました。では早速、ここから「カーネーション」総集編の前編の最後の部分、戦争に関する部分の上映から始めたいと思います。

**長**：ご視聴、ありがとうございました。それでは、この脚本を書かれた渡辺あやさんをお呼びしたいと思います。渡辺さん、どうぞ。本日、島根から来ていただきました。

**渡辺**：初めまして、渡辺です。よろしく、お願いいたします。(拍手)

**長**：(満員の大教室会場を見渡して)本日は、夏休み中の大学ということで、一体何人の方が来てくださるのだろうと、実は本当にドキドキハラハラしておりました。その不安を渡辺さんに申し上げたところ、渡辺さんが、「私は数少ないのは馴れています」とおっしゃられて……

**渡辺**：ずっとお客さんが少ない人生なので「大丈夫です」と言っていたら、こんなにたくさん来ていただいて。本当にありがとうございます。

**長**：羽田からの道中お話ししていましたら、NHKの方も含め、「きょう、行ってもいいですか」というお話が来たのに、

あまり良いお返事をされなかったとか……

**渡辺**：緊張するタイプなので。「カーネーションのプロデューサーからディレクターが行きたいとおっしゃっている」というメールが来ましたが、それは読んでいないふりをして来てしまいました(笑)。

**長**：そうでしたか。では、早速、本題に入っていきたいと思えます。

本日は「戦後70年」をテーマにしたシンポジウムで渡辺さんをお招きしました。「カーネーション」を、戦争を描いた作品として捉えてのことではありますが、ご承知のように、「カーネーション」は戦争だけで切り取っては申し訳ないというか、決して戦争を描くことが目的のドラマではなかったと思えます。モデルの小篠綾子さんの92年の生涯を通して大正から昭和、そして平成に至る日本の女性史、ファッション史、生活文化史でもあったと承知しています。

「カーネーション」の脚本のお話があって、渡辺さんが一番描きたかったこと、描こうとされたことは何でしょうか。

### ——戦争を描くということ——

**渡辺**：2009年の夏頃、プロデューサーから「小篠綾子さんをモデルとした朝ドラを描いてほしい」というご依頼がありました。

小篠綾子さんという方が本当に魅力的で、その人生も大変面白く、朝ドラにはぴったりの題材だと思いました。ただ大正末期から平成まで生きた女性ということで、当然その中に戦争という時代も出てくるわけです。実はその何年か前から「いつか戦争を描け」というオファーが来るのではないかと、この不安に思っていました。自分の知らない時代のこと、しかも経験された

方がまだ生きておられる中で戦争のような大きな出来事を書くというのは、作家として高いハードルを越えなければいけないことです。内心「来なければいいのになあ」と思っていました。

先ほどご説明いただきましたが、2010年に「その街のこども」という「阪神・淡路大震災」をテーマにした75分ぐらいのドラマを書く機会をいただきました。そのときも最初は「本当に嫌な企画が来てしまった」と思いました。実は私は阪神出身者でして、自分自身も辛すぎて封印してきた記憶であるあの震災を描くというのは、作家としてこれまで使ったことのない部分を使わなければいけないような作業でした。ただ、それを経たことで、曲がりなりにも一つ階段が上がったような気がしました。

作品というのは、いろいろな反響をいただくものです。「お前は、何もわかっていない」と怒られるのではないかという恐れが強かったのですが、やった後は「怒られて済むことなら、やったほうがいいんじゃないか」と考えられるようになりました。その後この「カーネーション」のお話をいただいたわけですが、自分にとっては二つ目の階段という感じでした。

来てしまったら最後受けるしかない、受けられなければ自分は作家として終わり、というような企画があるんです。私にとって、この2作はそういうもので、腹をくくるしかありませんでした。救いに思えたのは、やはりひとえに小篠綾子さんという女性の物語であったことです。そのバイタリティとユーモアをもってすれば、戦争のドラマもまた朝の15分にふさわしいものにできるのではないかと思います。

また朝ドラというのは全部で40時間あるのですが、そういう長い尺をもってこそ表現できることもあるのではないかと思います。

**長**：避けようもなく戦争を書かれたということですが、そうは言っても戦争はいろいろな描き方ができると思います。脚本のご執筆は、放送された年の1月ぐらいからということですね。

**渡辺**：はい、そうです。

**長**：母親でもあり、主婦でもある渡辺さんが、日常のお仕事もしながらどうやってこういう世界と行ったり来たりされたのでしょうか。

**渡辺**：そうですね。自分では意識しませんが、多分そっち側の住人になっていて、モードとして違うらしいです。だから、家族としては「もうしょうがない」「そっとしておこう」となっているみたいです。

**長**：そうした日常生活を営みながらどのように戦争を描こうとされましたか。

**渡辺**：振り返ってみても、私たちは前の世代から精一杯の平和教育を与えられてきたと思います。ただどうしても自分の実体験ではないゆえに、戦争というものに対して「大変だったんだ」と頭では理解できても、その辛さや悲しみに想像が及ばないところがあります。「カーネーション」という企画をすごくいいと思ったのは、戦争で亡くなってしまふ人のことを、そのずっと前から描くことができる。その人がどんなにいい奴だったか、ある

いは嫌な奴だったか。こんなことに腹が立ったとか、でも好きだったとか、そういうことを含めて身近な人物として具体的にイメージしておく。

その人が戦争で死ぬということ、それはどういうことか、というのをある程度の時間をもって、見る方にとっても、書く私にとっても体験として積み上げていける。その果てに、結局戦争とは人々にとってどういう出来事だったのかということが体感できるような気がして、そのように書いていったと思います。



### ——講演会をめぐる「なぜ」——

**長**：私は実務家として「難民を助ける会」というNGOを通じて、国際協力にも携わっていて海外の紛争地にも行っていますが、そういう人間がどうして「カーネーション」で「渡辺あやさん」なのか、というご質問を受けました。

**渡辺**：はい、びっくりしまして。私自身が視聴者として想定していたのは、たとえば、今うちの母親が70歳ぐらいですが、そういうおばちゃん、おばあちゃん、あるいは子供たち。とにかく分かりやすく面白く、ということだけを心がけて書いてまして、長先生のような方が見てくださっているとは夢にも思っていませんでした。なぜこんなシンポジウムにお招きくださったのかもお聞きしたかったんです。

**長**：そういうご質問を先ほど控室でもされて私の方が驚きましたが、私も「カーネーション」の大ファンです。「カーネーション」には、これからの人生を生きていくに当たって、一生の宝物と思える台詞がたくさんあります。その一方で、戦争の描かれ方が大変印象的でした。

私自身、海外で実際に起きている紛争地に行き、加害者になったり被害者になったりした方々と会っていますが、そのことを自分なりに解釈しようとする際になかなか言語化できないというか、頭ではわかったつもりで、もちろん、論文としては書くことができても、そのことを心の中ではよく理解できていないと感じることが多々ありました。そのことが、「カーネーション」の中に、何かストンと心に落ちるような形で描かれていたのだと思います。

**渡辺**：具体的に、どういうところでしょうか。

**長**：安岡家の皆さん、特に勘助さんが被害者なのか加害者なのか、彼を巡る描かれ方は、初めて出会ったように見え、大変衝撃的でした。

**渡辺**：長先生が活動されている中でも、どう自分の中で判断すればいいかわからないというような状況があるのでしょうか。

**長** : そうですね。実際の戦争・紛争で、誰が被害者で誰が加害者か。きょうまでの加害者が明日は被害者だし、被害者だと思っていた人が実は加害者であったりする。でも、そもそもそういう設定の状況をつくったのは、この人たちには何の責任もないところで起きた紛争で、昨日まで普通に暮らしていた人がいきなり加害者となったりする。

20年前、紛争中のボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァという町で起きたジェノサイド事件があります。事件のその日まで、普通の警官で、戦争中といえど、人ひとり傷つけたことさえなかった若者が、上官からいきなり銃を突きつけられて「殺せ」と脅され、1日70人も銃殺してしまいました。彼は、戦後自ら国際刑事裁判所に出頭するのですが、裁判の過程で、事件のその日を境に自分の人生は変わってしまったと語っています。こういう人が今も現実に存在します。そうした現在進行形の問題もすべて「カーネーション」に含まれていたように感じました。

——「ぺちゃんこ」の過去を解凍する——

**長** : 玉音放送後、ふらふら立ち上がった糸子が「さあ、お昼にしよけ」という印象的な場面がありました。8月15日をあんなふうに描かれたドラマも、これまでなかったよう

に思いますが、終戦の日をどう描こうということはずっと意識されておられたのですか。

**渡辺** : いや、どのように描こうというのはあまり考えなかったです。私はプロットというのも書かないので、「カーネーション」の場合は一週間分ごとに、それが小篠綾子さんの何歳から何歳くらいにあたり、史実的には何が起きているかということだけをプロデューサーに教えてもらって、あとはひたすら流れのままに書いていく感じでした。うちの娘が小さかった頃、「お母さんが子供の頃はもう戦争って終わっていたんだよね?」と聞かれてびっくりしたことがあるんです。「そうか、この子たちにとっては、そんなにも過去はぺちゃんこに見えているんだな?!」と。戦後30年も70年も彼らには大差ないんだと。けれどもひるがえて自分はどうかと考えてみたら、やっぱり同じようなものなんじゃないかと思いました。戦争なんて、テレビで見た映像や、学校の授業で教わったことをベースにしてしか考えたことがない。ごく一面的な見方しかしておらず、またそのことに気づいてもいませんでした。

でも「カーネーション」の第10週、開戦まもなく勘助という幼馴染が出征していくとき、糸子含め町の人々は「めでたい」と喜んで彼を見送ります。日本は戦争に勝つものだし、行けるなんて男らしくてカッコいいと、あの戦争はそんな気分とともに始まった。それが今「あんなものは二度と繰り返してはいけない」と、お年寄りがとにかく口を揃えておっしゃるまでに至ったわけで、そのプロセ



スには、ものすごい段階があったはずですが。その階段を、生身の人間の感覚を土台に、ひとつひとつ想像していきました。

まあよく考えたら8月のいちばん暑いとき、お腹すいてるし、寝られないし、フラフラもしてくるだろう、そのフラフラした状態の中で「終わりました」と言われたらこうなるだろう、というようにたどり着いたという感じなんです。

**長**：会場からも、8月15日の描き方について思い入れのあるご質問やコメントをたくさんいただいています。いま、「過去はぺちゃんこ」とおっしゃいましたが、このドラマの最後は奈津さんの後ろ姿で終わっています。渡辺さんに最初にお話をうかがった際、この奈津さんの姿を描きたかったとおっしゃっておられたのが大変印象的でした。

**渡辺**：糸子の親友だった奈津が90歳を過ぎていて、最後、その後頭部が映ります。白髪で短く髪が刈られていて、もうおじいちゃんなのかおばあちゃんのかもわからないような、それは我々が日常の中でごく見慣れたお年寄りの後頭部です。私自身も、そんな後頭部にことさらに興味を持ったこともなく、その中にどういう人生が収まっているのか、どれだけの記憶が詰まっているのか、考えようとしたことがありませんでした。けれどもあるとき、「実はお一人残らず戦争の記憶が入っているんだ!？」とハッとしたんです。

**長**：そのお話を伺ったときにぎょっと鳥肌が立ったというか。書きたかったことの一つが奈津さんの後ろ姿に凝縮されていたわけですね。

**渡辺**：はい。この話をしたときに長先生が涙ぐまれたのを覚えています。

**長**：会場の皆様も、最終回の奈津さんに同じ思いを抱かれたのではないかと思います。我々が普段出会うのお年寄りの、実は当たり前のことを気づかされたというか、我々は出会ったその方のことを知っているようでいても、実は長い人生の断面を見ているだけで、目の前にいる人のことも本当は全然わかっていないのかもしれないと思いました。

**渡辺**：そうですね。でも本当は軽く40時間分のドラマになるくらいものを、どんな方も持っておられるんだと思うんです。

**長**：今日の講演会のチラシを作る際に、カーネーションの説明として、「男たちの出征・戦死、心を病む人々、空襲、原爆、戦災孤児の犯罪や「パンパン」となった幼馴染の

姿、耐久生活などを通じて、戦中・戦後の混乱期を生きる人々の様子、戦争の加害と被害など、「普通の人」にとっての戦争が印象的に描かれました」と書き、渡辺さんにご確認いただいた際、「まったく朝からやるようなドラマじゃない。なんて重いんだ」とご自身でおっしゃっていました。

**渡辺**：はい。久しぶりに改めて読んで、つくづく思いました(笑)。

**長**：でも、それは別に悲惨なことばかりを集めて朝ドラにしたわけではなくて、その時代の方々が生きた日常を書いたらあんなったということですね。

**渡辺**：泣きながら戦争に行ってしまった勝さんも、出征後に浮気が発覚したりします。人間の人生はシリアスにまとめようと思ってもなかなかまとまらず、いろいろ綻びがあったり、しょうもないこともたくさんやっていたりするわけです。けれど、そういうものをひっくるめて我々の生活であり人生であるのですよね。

**長**：会場からの質問で、「きょうのためにわざわざ北海道から来ました」という方から、「あやさんの物語を進めるために、登場人物を都合よく動かさないところが好きです」とありました。普通、ああいう場所だったら勝さんは絶対浮気などしないはずなのに、しっかり浮気していたという。

**渡辺**：はい、そうですね(笑)。実はこの浮気話と戦後の糸子自身の不倫話については、スタッフの間からも「やっていいものか」と疑問の声があがったところなんです。でも綾子さんご自身も自伝の中でちゃんと告白なさっている。それを私たちが勝手に「なかったこと」にしてしまうのは、むしろ失礼なことのように思ったんです。

**長**：続いて『カーネーション』の中で、『この人物がこう動いてくれたらいいのに』と思ったことはありますかというご質問ですが。

**渡辺**：それを、なるべく思わないようにしています。尊厳と言うと大袈裟ですが、他の言葉が思い浮かばないので、私の中では「キャラクターの尊厳」と呼んでいます。「この人は改心したくないだろうな」と思ったら、たとえ物語的には悪い人のまま去って行くことになっても、それは「したくない」という気持ちのほうを大事にしてしまうところがありますね。

**長**：戦争の話に戻しますが、「戦争を繰り返さないために」ということで、今、いろいろな立場で議論がなされていますが、太平洋戦争前の日本社会に平和論が根強かったわけではないですよね。例えば、善作さんたちが勤助さんを送り出すときに「大丈夫、大丈夫。一番怖いのは腹を壊すことぐらいで、死なずに帰って来られるよ」と能天気を送り出すわけですね。あの頃は、日清・日露戦争、第一次世界大戦と日本はずっと戦争に勝ち続けていた時代で、勝ち続けている限り、「戦争反対」というのは少数者の意見でしかなかった。勝った戦争でも、そこで亡くなった方や、傷ついた方は同じようにいたはずですが。「カーネーション」ではまさに安岡家とその象徴でした。一度も出て来なかったおばちゃんのご主人は前の戦争で亡くなっているわけですね。

**渡辺**：はい。



**長** : 世の中全体が「戦争は勝つものだ」と思っているとき、安岡家の中では戦争は人を奪うものだということがわかっていたけれど、そうした社会の中ではそういう声を上げることはできない。反戦の声を上げるところか、個人の体験としてひっそりとするしかなかった。その辺は、安岡家にメッセージというか……。

**渡辺** : おっしゃるとおりで何も補足するところはありませんが、ドラマの意義というか、フィクションだからこそできることをなるべくやりたいと思いました。ドキュメンタリーや報道ではいろいろ支障があって取り上げられない部分というか。

勘助が戦死した後に、かなり長い時間が経ってから勘助の母親が、テレビで日本軍が戦地で何をしたかという特集番組が何かを見てしまったというシーンが出て来ます。もちろん事実を報道するのは悪いことではないし、そういう番組の存在を否定するわけではありません、たださっと、こういうふうに傷ついた母親もたくさんいたのだろう、ということを書きたかったんです。

**長** : 「あの子がやったんやな」という台詞は、反響もだいぶ大きかったのではないですか？

**渡辺** : ありました。それは、怖いぐらいに来ましたね。偏った思想を押し付けている、という批判を多くもらいました。けれど私が描きたかったのは、思想以前のただの感情なのです。私自身も書いて初めて気づいたことでした。あの安岡玉枝さんという人と一緒に息子の戦死を体験し、戦後を迎え、テレビを持ち、年をとった。そうすることで初めて見えてきた感情でした。ひとりの母親の、その人生を貫く悲しみについて、私は気づいたこともなかったし、気づこうとしたこともなかった。その自戒もこめて、どうしてもあのシーンを描きたかったのです。

—洋服に込めたメッセージ・洋服と平和—

**長** : 次に服に込めたメッセージについてお伺いしたいと思います。「カーネーション」では、根岸先生の言葉にあるように、「洋服は人に希望と品格を与えるような存在」です。私は踊り子のサエさんが大好きですが、サエさんも、それからバンバンになった奈津さんも服の力で再生していくわけですね。

**渡辺** : はい。

**長** : 洋服によって希望や誇り、品格を取り戻したりしますが、その点で洋服に込められた思いは平和の象徴でもあるわけですね。

**渡辺** : そうですね。単純に女性は素敵な服を着るとすぐバージョンアップできるものですよ。辛いことがあればあるほどそうだと思います。調子が悪いときは、好きな服を着られないものですし、もっと悪くなると、好きな服というものがさえなくなったりもします。「好きな服を着ていられる」というのは女性にとって、自己管理における大きな指針なのではないでしょうか。長先生も、自分が見てきた戦地の女性たちもそうだった、お洒落を決して忘れなかったとおっしゃっていましたね。

**長** : ええ。もちろん男性でお洒落な人もいますが、紛争地だからこそ、あるいは、先ほどのボスニアの話ですが、なぜ、毎日爆弾が飛んで来るようなところでこの人はハイヒールを履いているのだろう。生きるか死ぬかわからないときに、なぜハイヒールなのだろうと思ったことがあります。こちらは、すぐ逃げられるようにとジーンズとスニーカーでしたから。





東日本大震災の時がそうでした。3月11日直後はやはりそういう格好になりましたが、徐々に普段の服装に戻っていきました。それは記憶や恐怖感が薄れたというより、今日、すごく大きな余震が来て我々の生活が根底から覆るかもしれないけれども、今日が最後かもしれないけれども、普通にしていようと思ったときに、やはり普段の、普通の服装をするようになりました。

**渡辺:**「カーネーション」の登場人物で、唯一おばあちゃん役の庄司照江さんだけが実際に戦争を経験した方ですが、撮影でも防空頭巾を頑として被られなかったそうです。「こんなもん被らんかった。首にかけとくだけや」と。たしかに若い娘としては「こんなカッコ悪いもの被ってられるか」と思ったんじゃないかと。そういうことが、彼女たちの心の大事なところを支えていたんじゃないかと思えます。

**長:** ええ。私も いろいろな戦地や紛争地に行きますが、あるいは全く紛争がないところでも、お洒落をしている人たちがたくさんいます。アフリカでも真っ黒い肌にオレンジや赤、黄色の布を巻いて、パッとそこが明るくなるような。本当に貧しいところですが、そこに生きている人の心意気を感じます。

また去年、NHKのドキュメンタリーで取り上げられましたが、コンゴの男性でサプールというお洒落をする人たちの話がありました。そこでは、銃を持つことよりもお洒落をしたほうがカッコいいのだという。もちろん、全員ではなくて銃を持つ人もいますが、お金の大半を銃ではなくきれいな服を買うことで、一つの紛争予防にもなるのかなという感じでした。

**渡辺:** 糸子の恩師の言葉として「いい洋服は人に誇りと品格を与えてくれる、人は誇りと品格が持てて初めて希望が持てる」というセリフを書きました。どんな状況にあっても、人間の心にとって「誇り」は本当に必要なものなのでしょうね。「銃か洋服か」って、並べていいことか?という気もするけど、人というのは案外そういうものですよ。とてもよくわかります。

**長:** 「男性」性の象徴で、武器を持つことがカッコいい。だから、持たなければいけないという地域もあるわけで、そういう中で高いブランド服を買うことのほうに価値を見出す人。その人たちをカッコいいと思う若者たちがいるというのは、将来に繋がることだと思いました。

**長:** 将来につながるお話も少し伺いたと思います。「カーネーション」がミャンマーでも放送されたことを、会場の皆さんはご存知でしょうか。一時代前なら、海外で放送される朝ドラは「おしん」でした。耐え忍ぶおしんとは対照的な糸子が主人公の「カーネーション」が先方からも囑望されたことを、どんなふうにご覧になっていらっしゃるでしょうか。

**渡辺:** 単純に、それだけ豊かになったということだろうと思います。どういうドラマが人に見られるかということには、見る人たちの「どう自分祝福されたいか」という気持ちがかかり反映されるような気がします。自分の生活が苦しく、この苦勞に耐えるしかないというような状況にあるときに「耐えることの美しさ」を謳ってもらえたら、すごく救われますよね。どちらが良い悪いではなく、どの良さ、素晴らしさ、人生の中のどういう意義を人がいま求めているかということが反映されるのだと思います。

**長:** 次世代という意味では、打ち合わせさせていただいた折に、いまデモをしている若者たちに対して、「言葉を持っている」というお話をされておられました。

**渡辺:** 自分の世代は「これはおかしいな」とか「納得いかないな」と思っていることに対して、それを表現するボイスを持っていないというのをすごく感じます。鍛えられていない。自分の中にある違和感、怒り、主張といったようなものを、どういう言葉や声で伝えれば一番相手に伝わるのだろうかという訓練を、自分を含めてまったく積んでこなかったという気がしています。

一方、最近の若者たちは素晴らしいです。そんなことをやすやすと乗り越えて、真に人に伝えるための技術を体得し、あるいは編み出し、実践している。彼らのスピーチには快感があるんです。「言いたかったことを今、言っている」という解放の快感が、声をきいているだけでも伝わってくる。表現において最も大切なことだと思います。

**長:** 私は研究者のはしくれですが、その点、すごく反省させられます。こういう時代に平和を訴えていこうとする時、では一体どのような言葉で伝えるのか。「戦争がよくない」のはわかっている。「もう二度と繰り返してはいけない」こともわかっている。では、それらの定型句を越えて何を言語化してどのように伝えていけばいいのか。自分なりに、いままでそういうことは勉強し研究してきたつもりですが、それを越えるものがまだ自分の中にきちんと言語化されていない。それは多分、私だけではなくて、多くの方が、それぞれの立場で必死になっているような気がします。

**渡辺:** 私の場合は「いつか戦争のこともやらないといけないだろうな」という気持ちを抱き始めたきっかけがありました。個人的な出来事なのですが。娘が小学生の頃に私の従姉妹が花火大会に連れて行ってくれたんです。それがその年の8月6日でした。帰って来てから、「花火はとても楽しかったけど、帰りのタクシーがすごく嫌だっ





た」と言うので「何で?」と聞いたら、「ずっと原爆の話をしていて、悲しい気持ちになった」。まあ子供の反応なので、それはいいのですが、それよりもハッとさせられたのは、同じタクシーに乗っていた従姉妹とその友達は、ラジオでそんな話をしていた記憶がまったくなかったんです。「そうだったっけ? 話に夢中で全然聞いていなかった」と。もし、私とそのタクシーに乗っていたらどうだったろうかと考えると、きっと私にも聞こえていなかったのではないかと思います。私たちにとって、戦争はもはや夏の風物詩になっているのだと思いました。

学生時代に平和教育をバッチリ受けてきたし、毎年NHKが特番をやってくれる。なんだかそれでもう安心しきってしまって、それ以上考える必要なんてないように思っていました。それは私個人の能天気さのせいでもあります。表現上の定形のようなものが出来上がっているせいでもあると思います。戦争といえば8月の特集番組、こういう音楽がかかって、こういうフォントで、こういう構成で、ナレーションのトーンはこうで、というのが一つの定形になっていて、その定型に自分たちは安心しきっているのではないかと。こういうことがそのまま延々と繰り返されていくと、もっと伝わらなくなるのではないかと。僭越ながらちょっとした危機感として持ったということもありました。

たとえば先生がおっしゃるように、どうすれば戦争や対立がなくなるのかということの答えは、やっぱりお互いを認め合う、多様性を受け入れるということだと思うんです。そんなことは世界中の人たちがわかっていることですし、ドキュメンタリーならそれが「まとめの定型」ですよ。ただ「多様性を認め合う」ということを実践するのは本当にむずかしいことで、その難しさをこそ考え合うべきなのに、そこに至る前で定型に安心してしまふ。そういうことがとてもよくある気がします。

### —言葉をパッケージ化せずに、どさっとおく—

**長** : 夏になると繰り返される風物詩とおっしゃいましたが、きょうのこの試みも、風物詩にしないための努力というか、その一つのつもりでいます。実は、私自身が戦争に関係する研究をしたり、紛争地に行ったりしつつここ数年、戦争をテーマにした講演会を企画しようとした際に、きまって頭に浮かんだというか、必ず巡ってきたのが渡辺さんと「カーネーション」です。その都度、渡辺さんにご連絡をとろうと試みたのですが、伝手も何も無い。ホームページを検索しても事務所に所属していらっしやるようでもなさそう。調べても連絡先がわからず、何度か諦め、でも、やはり何かしたいと思って調べては、「やっぱり、わからない」。それを何度か繰り返しているうちに、ついに戦後70年の年の春となり、「もう、やるなら本当にやらないといけない」。だめならだめで、ダメならダメと断わってもらわないと、私はこれ以上、先に進めないと思ったわけです。断われたら、「渡辺さんとはご縁がなかったのだから、次を考えよう」と初めて先に進め

る、とそう思ったわけです。それで、NHKの方の伝手の伝手を辿って、お手紙をお送りしました。そうしたら読んでお返事をくださって……。

冒頭の質問とも少し重なってしまいますが、会場からも「講演はあまり受けないとお聞きしましたが、きょう受けられたのはなぜですか」というご質問が来ています。

**渡辺** : それは長有紀枝先生が立派な方だからです!「難民を助ける会」の理事をなさってるとか、ご経歴を読んだ瞬間に「ああ、もうこの人の言うことは聞くしかない……」という感じで。私は「お偉いさん」というのはわりと大丈夫なのですが、「立派な方」に対しては「言うことを聞くしかない」と思ってしまうので、それだけです(笑)。私は確かに講演もほとんど受けませんし、インタビューも可能な限り避け、脚本以外の文章もなるべく書かないようにしています。一体それはなぜなのか、自分でもよくわかっていなかったのですが、今回改めて考えてみたところ、どうやら脚本を書くときのためにしているようなんです。私にとって、自分の考えというのは単なる業務用の材料みたいな感じで、汚いまだサッと置いておかないといけないものなのですね。

例えば、こういう場でお話する場合はやはり、ある程度言葉をきれいに磨いてパッケージして、人に伝えようとしています。でもそれをしてしまうと業務用の材料としては単純化されるというか、そんな人前に出せるようなツルツルしたものは、脚本を書くときにはあまり役に立たないわけです。だから、なるべく汚いまだサッと置いておきたいのです。

**長** : 脚本家であるので脚本以外は書かないというお話は先ほど、打ち合わせのときにもうかかったのですが、その時、「インサイド・ヘッド」という映画をご覧になった際の、とても印象的なお話をされておられました。脚本以外は書かないもう一つの理由がわかったとおっしゃって。コンピュータ・アニメーション3D映画だそうですが、



**渡辺**：すごく面白い映画で、人の頭の中にある感情がキャラクターとして登場するんです。具体的に言うと「ヨロコビ」ちゃんと「カナシミ」ちゃんが、頭の中で迷子になってしまうんですが、元の場所に戻ろうとするとときに「考え」という列車に乗ればいいことがわかって、乗ろうとします。でもその駅前に小さな部屋があって「ここに入ると危険」と注意書きがある。「ヨロコビ」ちゃんと「カナシミ」ちゃんは、急いでいるからその部屋に入るわけです。どう危険かという、3Dのアニメーションなのでキャラクターも3Dなのですが、その部屋に入った途端に「単純化」されるんです。絵が2Dになってしまい、さらにそのあと記号になってしまうんです。そうしないと、「考えの列車」には乗れないということなんですよ。それが私にはすごく腑に落ちました。

まさに、ああいうことです。自分の考えていることが記号になってしまうと脚本に使えない材料になってしまうので、あの「考えの列車」に乗せないようにしているんだと思います。

**長**：「だから、脚本以外のものは書かない」とおっしゃった理由が本当に面白いと思いました。



### ——脚本家になったきっかけは——

**長**：ここから会場からのご質問もどんどん紹介していきたいのですが、「なぜ脚本家になったのですか」という、渡辺さんが、脚本家であることに対してたくさんの質問が来ています。

**渡辺**：子供を2歳まで専業主婦で育てていたのですが、2年間ほとんど外にも出ず、主人と赤ん坊とだけの狭い人間関係の中で暮らしていたら、あまりにもつまらなくて、ある時期から頭の中で勝手に物語を作り出したんです。自分が小説をよく読む人間だったので、小説というのは文体が確立されていないと書いてはいけないという、そのハードルが非常に高かった。だったら、台詞だけをどんどん書き出していけばいいやと思って書いていたら、脚本みたいなものになった。書いてしまったら、これをどうにかして映画なりドラマなりにしないといけないという強迫観念に駆られて、それからプロを目指しました。

**長**：ありがとうございます。次のご質問は東日本大震災の関係からです。「この作品は、東日本大震災の年の下半期からの放映でした。営みのすべてを瓦礫と呼んだあの様子を先生はどこで知り、どんな思いを持ちました

か。また、戦時中の脚本を書くときに、東日本大震災の影響はありましたか。ご自身としては、その年に放送されたことに、近現代史的に大きな意味を残すと思いますか」という質問です。

**渡辺**：影響はきっとあったと思いますが、なるべく「ない」ことにして書き続けようと思ったのを覚えています。あのニュースを見たのが、3週目ぐらいの台本を書いているときだったと思いますが、1日分を書き終えてテレビをつけたらニュースをやっていました。

自分に限らず、こういう仕事をしている人たちは多かれ少なかれそうだったと思いますが、想定している受け手、視聴者像がすごく大きく揺れました。これだけの出来事が起こってしまった。果たして自分はこのことを踏まえてこの先を書いていったほうがいいのか、あるいは、とらわれずに書いていったほうがいいのか。とても迷いましたが結論としては、とらわれずに書いていこうと思いました。何となくそのほうが、見ていただいたとき力になれるのではないかと思ったんです。そもそも最初から「朝から元気になれるもの」を目指していたはずなので、迷わずそのまま突き進もうと。下手に付け焼き刃的なことをしてしまうと、私自身の不安や動揺が伝わってしまうのではないかと、見る人を不安にさせてしまうのではないかと気がしました。

**長**：関連しますが、「この作品を書く前と後でご自身に何か変化はありましたか」というご質問です。

**渡辺**：私自身は変わっていないのですが、ただひとつ確信を強めたというか、自信を持ったことがありました。テレビドラマの現場では、「ながら観されているということを前提に作らねばならない」ということをよく言われるのですが、映画からこの仕事を始めた私にはそれがどうしても受け入れられなかったんです。やっぱり真剣に観ていただいていると思わないと、私自身も本気の想いを書くことができません。なので、勝手にそう思い込むようにしていました。視聴者にはちゃんと向き合ってもらっているし、描いたことは記憶してもらっている。結果、分かりやすい説明も少ないし、何ヶ月も前の話を回想シーンもなしに平気で蒸し返したりする、かなり親切とは言い難い作りになりました。それでも、そのせいで「伝わらなかった」と感じたことは一度もありませんでした。むしろ視聴者の受信力というか、観る姿勢の真剣さというのは、想像以上にすごいと思われて、襟を正すようなことの方が多かったんです。あの実感を得られたことは私にとって、とても大きな収穫でした。

ただ作品自体については、とりあえず早く忘れようとしてきました。毎回そうなのですが、やっぱり全身全霊で打ち込むことなので、記憶として、ちょっと気を緩めるとフツとそちらに引き戻されるようなすごく強い磁場なのです。もう一日も早く忘れたいですね。

**長**：「カーネーション」も、終わってからなるべく見ないようにされていたという。

**渡辺**：一回も見たことないですね(笑)。

**長**：今回、きょうの講演会のために、総集編を見直してくださいましたね。

**渡辺**：はい、見ました。尾野真千子がすごいと思って(笑)。

—尾野真千子さんのこと—

**長** : 尾野真千子さんは、ずっとご縁のある女優さんですよ。

**渡辺** : そうですね。この作品の前に「火の魚」という1時間ぐらいの短いドラマと一緒にやりました。当時はわりと幸薄い人の役ばかりで見かけていたので、儂げな人なのかと思っていたら、打ち上げの席でボス猿の真似をやってくれたんです。通っていた小学校の登り棒をいつもボス猿が占拠していたそうで。ボス猿の真似をしながら、すごくドスを利かせてしゃべってくれたとき、とてもはまって、「あっ、この子は極妻とかもできる!」と思ったんです。いつかああいう役をやってほしいと思っていました。

**長** : 尾野真千子さん演じる「糸子」は、会話の全て、疑問文さえもが、相手を責めるような詰問調でした(笑)。

**渡辺** : そうですね。

**長** : 私はあの感じが大好きで、私もあの岸和田弁をしゃべりたいとすごく思いました。

**渡辺** : アハハハ。

**長** : 「『火の魚』を見て以来のファンです」という方や、「『火の魚』を見てNHKに就職を決めました」という方のコメントもあります。この「火の魚」で尾野真千子さんは主役を演じたわけですが、「カーネーション」の主役を尾野さんが演じられるということで、ストーリーや状況設定に影響したことはありますか、という質問です。

**渡辺** : それはいいですね。でも、芝居を見ていたらすごく気持ちよくて、さらなる気持ちよさを求めていったところはあるかもしれません。この子は何でもできるんだ、こちらが思った以上のものを返してくれるんだという信頼が、無意識の中でのすごく励みになっていたと思います。

**長** : 半年を通じてドラマを見ているうちに、私たちもとてもないものを目撃しているのだというような思いを持たされたわけですが、それは脚本家としても感じられましたか。想像した以上と言うと失礼な言い方ですが。

**渡辺** : 作り手としてはもちろんいろいろあって失敗もしているし、もっとこうすればよかったという反省は山のようにあります。でも、尾野真千子は本当にすごかったですね。現場を守り抜き、高め続けた。やはり作品には全てが出てしまうと思うんです。その場がどういう場であるか、関わっている人たちがどういう気持ちでその作品に臨んでいるかというのは、必ず出てしまうものです。もちろん脚本も他のスタッフも頑張りますが、場の中心にいる彼女が一番の要だったんです。

**長** : それは、本当に感じました。次のご質問です。「男性性が非常に強く、特に善作さんなどに表れていたと思いますが、女性が男性と対等に仕事ができないように感じていますが、脚本家ご自身としてそのような経験をされたことはありますか。」

**渡辺** : それは、ほとんどないですかね。むしろ私は主婦で、主人が食い扶持は稼いでくれているということにすごく甘えて



いると思います。女性は、どんなに稼ぎが悪くても社会的に非難されるということがないんですよ。その点、男性は気の毒なのですが、ぷらぷらと好きな仕事だけをしていても、誰に怒られないのは主婦の特権かと。

**長** : それを余すことなく利用しながら。

**渡辺** : ええ、そうですね。

**長** : 次の質問です。「『カーネーション』の制作スタッフの方の談話に、「渡辺あやさんは作中の人物に自分がない、自己投影せずに外側から見て書く」とありましたが、普段はどのような観点でキャラクターをお作りになりますか。」

**渡辺** : 自分が好きな人を見ていたい。それが、最も基本的なモチベーションですね。この仕事を始めたときからそうですが、作品の中に自分は決して存在しないんです。ただ良いところも悪いところも含めて自分が面白がれる人たち、あるいは関係性。その関係の中からお瞬浮かび上がってくる何か尊いもの、どれだけ時間をかけてもそこに辿り着きたい、と思って書いています。

**長** : 「カーネーション」の中で一番好きな台詞は何ですか?

**渡辺** : 为什么呢?先生は、ありますか?

**長** : 私は、「宝抱えて生きてくよって」というところ。その前の「ヘタレはヘタレで泣いとれ」の「ヘタレ」という言葉も印象的でした。自分で弱くなったら、糸子さんに「ヘタレ」と言ってほしいと思うような(笑)。

**渡辺** : あれは実は全然自信なかったんですよ……全編にわたってあまり書き直しというのはしなかったんですが、あそこだけは尾野真千子が退場して行くところなので何回も書き直して、最後にはもうわからなくなって、「もうしょうがない」と思いながら渡しました。

**長** : そんなに悩んで書かれた部分ですか。

**渡辺** : そうですね。難しかったですね。

**長** : 先ほど伺った中で、最初の頃は1ヵ月に2本ぐらいのペースで、だんだんドラマのほうを追いついてきてしまって、最後の頃は本当に大変になったということでしたね。

**渡辺** : もう1週間に1週分みたいな感じでした。毎回そうなるらしいですけど、分かっているならもっとちゃんと計画立ててくれればいいのに(笑)。

**長** : そうなってしまったときに、一話でそれだけ書き直すというのは大変ですよ。そのときは、家事もほとんどできなくなったという。

**渡辺** : そうです。見るに見かねて、うちの母親が来てくれて御飯とかも作ってくれていたようなんですが、その記憶さえおぼろげですね。



## —戦争とつながっている今—

**長** : そうだったんですね。さて次に、最後にお流しする「カーネーション」の一話について、そのお話を伺いたいと思っています。

きょうの進め方について、お話をしたときに、私が素人なりに印象的な戦争の部分を取り、その映像を流しトークをする、という形式はどうでしょうと、ご提案させていただいたときに、「総集編の前篇の終わりの部分が戦争を描いているので、そこを流しましょう」ということになり。「では、次の映像はどうしましょうか」というときに、渡辺さんのアイデアで、細切れに流すのではなく一話丸々見ていただくほうがいいのではないか。では、その一本をどうしようかといったときに選んでくださったものが、最後にお流しする回です。

**渡辺** : 見ていただく前に長々と話すことは控えたいと思いますが、書きながら「この戦後が私たちのいまに繋がっているんだな」と一番身をもって感じた回でした。中に小さい女の子が出てくるのですが、終戦のときに5歳だしたら、いま75歳ぐらいでいらっしゃるでしょうか。この方の戦後の人生の中に、高度成長期があったり、バブルがあったりする。同じ時代を生きながら、私とは全然違う風景をこの方は見てこられたんだろうなということを感じました。それまで「なぜ、こんなひどい事件が起こるんだろう」「こんなひどい人がいるんだろう」と思うようなことと、あれだけの戦争があったということをつづけて考えたことがなかったのですが、初めて「関係あるかもしれない」と思いました。街がきれいになり、経済が発展し、戦争の記憶が薄れているとはいいながら、これだけの大きな出来事が今の私たちに繋がっている。人の心の傷というもの、そう簡単に消えない、街の傷跡よりもずっと長く残るものだというということを、私たちはよく知っています。あの戦争も、これまで私たちが想像してきたよりずっと、いまだ社会の中に強い影を落としているのではないかということに改めて思いました。

**長** : このお話をメールでやり取りしたときに、渡辺さんが、「私自身、こんな日から70年というのがいまの日本なのだと考えると、我々が享受している豊かさと同時に、抱え込んでいる歪みや闇の正体が少しわかる気がする」と書かれていたのが非常に印象的でした。まさに、いまおっしゃったことですね。

**渡辺** : 自分がこの回を書いて初めて気づいたことだったのです。

**長** : 私も海外の紛争地で、紛争が終わった後の社会を見るとき、この国々は移行期にあるのだな、と観察していましたが、ある時ふと気づきました。日本はまさにそういう時期を辿って今があるのだと。これは海外の話ではなくて、いま周りにいるお年寄りの方々の生きた時代なのだ。彼らはまさに移行期を生きてきて、その人たちが横にいたのに私は全く気づかずいたのだということにも、改めて気づき、はっとしたことがありました。

**渡辺** : はい。

**長** : それからもう一つ。ご質問にもあって、私自身も伺ったかったことに「死」の問題があります。「カーネーション」は、「死」がすごく身近にあるドラマでもあったと思います。同時に、その「死」が終わりではないということも強烈に意識したドラマでした。糸子の死の翌日、「死にました」というナレーションで始まったり。

本日、最後の質問ですが、渡辺さんは、どのように「死」というものを捉え、考えておられるのでしょうか。

**渡辺** : もちろん自分も死は怖いですし、多くの方にとって、心の中に非常に重たい石みたいにあるものだと思うんです。でも、本当にそんなに重たいかどうかは、案外考え方ひとつだったりするのではないかと。

「死は終わりじゃない」とか「死んだけど幸せ」とかは、報道とかドキュメンタリーでは許されない表現です。でもフィクションだったら言える。人の死に対して、悼むとか悔やむとかとはまた少し違った感情、構えをもって向き合うということが、物語の果たせる役割なのではないかと思っています。死に対する新しい発想というかアイデアが、その重たさをひとつでも取りのぞけるということがあるのではないかと。

**長** : 「決めたもん勝ちや」という台詞がありましたね。あれは、そういうおつもりで書かれた台詞ですか。尾野真千子さんの最終回の場面です。

**渡辺** : そうですね。「相手が死んだくらいで、なんも失くさへん」と、私自身も信じたいと思って書きました。

**長** : 多分、そこに共感している方も大勢いらっしゃると思います。そろそろ映像に移る時間ですが、渡辺さん、最後に一言お願いします。

**渡辺** : きょうは、本当にありがとうございました。

この国に生まれた表現者として今年、これからどういう仕事をしていくべきかを例年以上に考えさせられた年でもありました。多くの方が考え始められていることでもあるし、ずっと前から考えてこられた方もいらっしゃると思います。この日本という国は原爆が2回落ちて、原発事故があり、今年「終戦70年」を迎えました。

この国でこれからなにを表現していくべきなのか、という問いに対して私自身は、平和国家であることをもっと享受する、謳歌する姿勢が大切なのではないかというふうに思っております。それはあぐらをかくということではなく、



むしろ逆で、だからこそできることや、思えること、受けられる恩恵のようなものを見つめて大事にしていこうということです。

素晴らしい映画やドラマ、人に伝わる作品というのは一つ大きな共通点があります。それは、その作品を作れるという機会、あるいはその作品が持つテーマを心から謳歌している。たとえば非常に陰惨な事件を扱ったような映画でも、作り手が与えられた機会に誠心誠意向き合い、できる限りのことをやり尽くしていると、不思議な喜びや心地よさ、いろいろ豊かなものが伝わってきます。逆にそれがないものは、どんなに表面的なメッセージが素晴らしくても伝わってこない。そういうものだと思います。

私は脚本家なので、この国の人間として何をしていくべきかという大きなテーマも、このベースの上に物を考えていきたいと思っています。それが今後どのように実るかは、まだなにもお約束できないのが申し訳ないのです。

**長** : 「今後、どういう作品をやりたいですか」というご質問もありました。

**渡辺** : よく聞かれるんですが、全然ないんですね。でも、「カーネーション」もそうだったように、自分に準備が整ったときに、向こうからやってきてくれるもののような気がしているので、欲ばらず地道にやっていきたいと思っています。

**長** : 我々はファンとして、また渡辺さんの作品に出会えるのを楽しみにしています。

**渡辺** : ありがとうございます。

**長** : あれも聞きたい、これも聞きたいと拙い司会で、質問が飛んでごめんなさい。

それでは、早速、渡辺さんが選んでくださったこの1本をご覧いただきたいと思います。余談ですが、きょうご登壇いただくに当たって、講演会のタイトル案をいろいろお示しました。「戦争を考える」をテーマに幾つか出したタイトルの一つが、本日の「カーネーションに見る私たちの過去・現在・未来」というタイトルでした。このタイトルを渡辺さんが選んでくださったわけですが、このタイトルと、これからご覧いただく回がまさにつながりますね。

**渡辺** : そうですね。終わった後に余計なことを申し上げるのは好ましくないので、私はここで失礼をさせていただきます。

**長** : 渡辺さんスタイルで、この後は何も語らずにそっと退出されるというご希望です。

**渡辺** : アハハ。そのほうが、よろしいかと思ひまして。

**長** : はい。では、皆さん、渡辺あやさんはここまですになります。改めまして、今日は、島根からわざわざ来ていただき、本当にありがとうございました。

**渡辺** : ありがとうございます。(拍手)

